は疑いなく信じておりました。ですが、そのとき初めてイエス様がどんな思いで私のために十字架にかかってくださったか、そしてどんなに私を愛してくださっていたかを知らされました。驚きとともにただただ感謝でいっぱいでした。

この時から、自分を見る必要がないこと、ただイエス様に目を向け続けることがどんなに大切でどんなに恵みであるかを感ずるようになりました。今思うとそれもほんの一端を知ったにすぎないと思わされるのですが、このような自分を受け入れ愛してくださるイエス様に出会えたことは本当に喜びです。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

（ローマ　7・24～25）

3 主のご臨在

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。（ヘブル　12・2）

私をご自分の喜びとしてくださる、そのような方が他にいるだろうかと、私の人生の柱のようにいつも心に携（たずさ）えてきたみことばです。真の信仰者とはイエス様ご自身において他にはなく、この方ゆえに私は暗闇から救い出されたのだと感じる次第です。二〇一五年に同じイエス様を信じる伴侶（はんりょ）が与えられましたが、今は夫婦にとって思いの深いみことばです。結婚生活はまだ数年ですが、私たち夫婦にとっては思いがけない出来事が重なるように起こされた年月でもありました。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（1ペテロ　4・12～13）

このみことばのとおりに喜べると言えるような者ではないですが、今も心に留めていることがあります。思いがけないことが起こり、夫婦にとって大きな決断を迫られ、先が見えなくても進まなくてはならないことがありました。そのような中にあって夫婦で聖書を開き読んでおりました時、私はとつぜん胸がいっぱいになり言葉にならなくなりました。イエス様が共にいてくださることを深く思わされたからです。そして確かにイエス様は私たち夫婦にとって助けであり支（ささ）えであることに感謝を覚えました。

あなたこそ、私の巌、私のとりでです。・・・あなたは、私の悩みをご覧になり、私のたましいの苦しみを知っておられました。あなたは私を敵の手に渡さず、私の足を広い所に立たせてくださいました。・・・　私は告白します。「あなたこそ私の神です。」私の時は、御手の中にあります。（詩篇　31・3、7～8、14～15）

一つひとつのできごとを通して、それが人の目にどのように映ろうともその先に大きな慰めと恵みと感謝を夫婦で覚えるに至りました。この経験は私にとって掛け替えのない宝です。

4 賛美

私は相変わらずどうしようもない者です。自分の性質も相変わらずであり、自分を見続けると立ち行かない者です。しかし、このような者に神様の愛を知らせてくださり、新しい歩みを与えてくださいま

した。それだけでなく、かの日には、このような者をイエス様に似た者へと変えてくださるという約束が与えられていることを思うと望みに溢（あふ）れます。希望のない虚しさからイエス様の十字架のご愛を知らせてくださり、このような望みを与えるまでに導いてくださったことを思うと本当に不思議です。

聖書には、イエス様はただ一人死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まわれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方とあります。その方が私を生かしてくださるために、目に見える人の姿をとってくださり、人として誰よりも貧しくなられた事実と、よみがえられて今も生きて私を導いてくださっている事実を覚えます時、ただ感謝することしかできません。

いくら考えても理解できませんが、このような私にもイエス様が現れてくださったことを心から感謝し御名を褒（ほ）めたたえます。その唯一の主なるイエス様からいつも目を離さないで歩んでいきたいと願っております。

まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました。
（詩篇　116・8）

主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。（詩篇　116・12～13）

私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。…主の家の大庭で。エルサレムよ。あなたの真中で。ハレルヤ。
（詩篇　116・17、19）

岡本恵以（おかもとえい）
一九七八年七月三日生まれ
町田第一中学校、成瀬高等学校、産能短期大学卒
現在　弁護士法人むらかみ勤務
妻／　岡本江里子

巻き物の書（聖書）に私のことが書いてあります

山本　信義



妻の美智子さんと

小学校四年生頃のことだったと思います。なかよしの厚くんと道路に絵を描いて遊んでいた私は、科学誌で仕入れた話を自慢げに話し始めました。「宇宙は膨張しているんだって」「宇宙の果てのその先はどうなってるんだろう?」「何もないのさ」…「何もないって…どういうことだよ」「だから何もないんだよ」…たじろぐ私。しばしの沈黙の後、「この話は考えていると気持ちが悪くなってくるから、もう止めよう」との厚くんの提案で課題を棚上げにして、幼い二人は別れたのでした。あれから随分と年月が経ちましたが、何と聖書の中にその答えがあったのです。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」
（出エジプト　3・14）

わたしは近くにいれば、神なのか。――主の御告げ。――遠くにいれば、神ではないのか。人が隠れた所に

身を隠したら、わたしは彼を見ることができないのか。
――主の御告げ。――天にも地にも、わたしは満ちているではないか。――主の御告げ。――
（エレミヤ　23・23～24）

神様の存在は私にとって全然問題ではありませんでした。そして、唯一の創造主なる神以外に神は存在しないと信じていました。これは生まれ育った家が無教会のクリスチャンホームだったからですが、それなのにイエス・キリストこそが神様なのだという全人類にとって何よりも重要なことが、長い間私には受け入れられなかったのです。そんな私がイエス様を唯一の救い主なる神様と信じる者になったのです。

何事にも終わりがある中で悪戦苦闘しているのが人間ではないでしょうか？死という終わりがあるので、「有意義で幸せな人生を！」「自分の生きた証（あかし）を残そう！」…と多くの人は頑張っているのだと思います。けれども、私は死の問題を先送りにして、ただ楽しく、幸せでありたいとチャランポランに生きてきたのです。それでいて他人から認められたい私は、ただただ我儘（わがまま）なだけの男でした（過去形ではなく、今なお陰険で我儘です）。当然、認められるには程遠く、人生何一つうまくいかぬとアルコールをあおって当てもなく彷徨（さまよ）うような日々でした。三十一歳の頃、私には縁談がありましたが、式の一ヶ月前に婚約を解消し、相手の方やそのご家族、友人たちを傷つけ、荒（すさ）んだ日々を送っていました。その頃、妹はひどい鬱（うつ）症状にありましたので、私の実家は大きな悩みの中にあったのでした。そんな時、私のアパートに母から葉書が届きました。葉書には母の親友の結婚式があるから妹と一緒に来て欲しい旨（むね）が記されていました。

夜の吉祥寺集会で行われた故戸田孝子姉の結婚式は、六十二歳の花嫁が光輝き、居合わせた方々も口々に感謝、感謝と…感謝に満ち溢れ、清さがその場を支配していました。これが私にとって初めてのキリスト集会との接点だったのですが、私のような放蕩息子が帰るべき所とは本当はこういう所なのだろうと思いました。そして何故かとても懐かしく感じました。

けれども、そんな思いを与えられてもなお、主イエス様の御許（みもと）に立ち返ろうとしない者のために、母にクモ膜下出血という重篤な病が与えられたのです。母はいのちこそ取りとめましたが以来四半世紀に及ぶ寝たきりの人生となりました。母が倒れた後、六十二歳の新婦が色々と面倒を見てくださいました。家庭集会にお誘いくださったり、同年代の信仰の兄弟をご紹介くださったりと…妹と私は吉祥寺集会の礼拝や福音集会、家庭集会に参加する機会が少しずつ増えていきました。そして、いろんなことを通してイエス様と自分自身の関係について教えていただいてきたのです。

振り返れば、日曜学校に行かなくなった中学生の頃から私をイエス様から遠ざける不思議な出来事を体験してきました。中学の修学旅行で初めてＵＦＯを目撃し、高校の頃には身近な場所で頻繁（ひんぱん）にさまざまな形のＵＦＯを見ました。ＴＶのＳＦ映画では宇宙人の前に十字架を掲げて出ていく神父が一瞬にして殺されてしまうシーンを見たり…と。くだらぬ話と一笑に付されるかも知れませんが、こんな体験をしますと、イエス様への非常に強力な不信となってくるのです。

こんな私のことを多くの兄弟姉妹が祈ってくださったのだと思います。私からイエス様を遠ざけ、妨げてきたものが次々に取り除かれていったのです。ＵＦＯのことも、ある雑誌の記事から解決に導かれました。その記事には、何年何月に帰ってくるから宇宙船を迎える場所を建設しておくようにと宇宙人から指示された人が実在し、その人は生涯と財産を賭してその指示に従った挙句に、結局宇宙人はやってこなかった、という酷（ひど）い話が記されていました。そして、その

8人の証し

Unser HERR lebt

人の体験は事実だが、それは一種の心霊現象のようなものだと結論していたのです。私はすぐにピンときました。UFOはサタンの妨げだった！嘘つきのサタンの奴は本当にいるんだ！と知った時、それは取りも直さず神様の存在の逆説的な証明となったのです。

にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。（マタイ　24・24）

また、私には子供の頃からお決まりの怖い夢があって、集会に集ってからも悩まされていた悪夢でしたが、長い間何が怖いのかすら分かりませんでした。

私にとって人生最後となったその悪夢を見る少し前のことです。吉祥寺集会で中学生くらいのお嬢様の葬儀があり、一緒に参列していた信仰の兄弟が「天国に行けてうらやましいね」と親しく私に話しかけてくださいました。「いや。俺にはまだやりたいことが山ほどある！」と私は思いましたが、その兄弟はさらに天国が如何に素晴らしい所か、しかもイエス様が十字架にかかって身代わりとなって死んでくださったので、ただイエス様を信じるだけでその素晴らしい天の御国に迎え入れていただけるのだと教え聞かせてくださったのです。そんな出来事の後、定番の怖い夢を見た私は、夢の中で「死んでしまう！」と死の恐怖に怯（おび）えている自分の哀れな姿を知ったのです。その夢の中で私は、「兄弟が言っていたように死んでも天国ならまあ（死んでも）いいか！」と初めてイエス様の約束に賭（か）けたのです。以来、その恐怖の夢は一度も見なくなったのです。

不謹慎でいい加減な態度かも知れませんが、夢の中とは言え私が死んでもよいと思えたのは奇跡でした。聖書にあるとおり、私は死の恐怖の奴隷だったのであり、確かにイエス様の十字架の御業の故に、イエス様の死からの甦りの故に、死の恐怖から解放されたのでした。

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

（ヘブル　2・14～15）

それでもイエス様が神様であると信じられない私は、死の恐怖の原因である罪がいかに根深いものか、そもそも自分の罪とは何なのかをはっきりと知らされることになったのです。私はいい加減ですが、イエス様にはいい加減さ、曖昧（あいまい）さはまったくなく、私が曖昧なままに問題を先送りすることを決してお許しにならなかったのです。

私たち、すなわち、私とシルワノとテモテとが、あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり。」と同時に「否。」であるような方ではありません。この方には「しかり。」だけがあるのです。

神の約束はことごとく、この方において「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。

（2コリント　1・19～20）

私の運転で、集会の兄弟姉妹と一緒に車で移動していた時のことでした。交差点に差しかかった私は、直進先が渋滞しているのを見て、とっさの判断で右折して渋滞を回避したのです。ところが、右折した道路の方がもっと酷い渋滞だったのです。誰にもこんな失敗はある筈ですが、同乗していた信仰の姉妹は私に「今、兄弟は祈られましたか?」と言われたのです。わけが分からないでいる私に、その姉妹方は、人間が自分の善悪の基準で判断して歩むこと、自分の頑張りで人生を切り開いていけると思っている態度が、実

8 人の証し

Unser HERR lebt

は神様に対する罪そのものであって、そんな心から出た行動の一つひとつが罪汚れたものなのだと教えてくださったのです。そして、何事も神様に祈らずに自分勝手に動いてはダメなのだと教えてくださったのです。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。（エレミヤ　17・9）

この事は私にとって大変ショックでした。私の人生、存在自体が罪だったからです。「そんなことまで祈るのかよ！」…と不自由で窮屈（きゅうくつ）そうにも思いました。でも、先行きの不安、死ぬ前に何かをなさねばという焦（あせ）り、自由なようで空しく彷徨っているような人生、心を満たしてくれる何かに飢え渇いている自分…こんなことを感じ始めていた私は御代田の国際福音センターに向かう高速道路で進路変更、追い越し、休憩の度に意識して神様に祈りながら運転していたのです。

――万軍の主は仰せられる。――わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。（マラキ　3・10）

運転の最中、私は心の中からイエス様についての違和感、不可解さがなくなっていることに気付いたのです。何が起こったのかは今も分かりませんが、私を愛し、私の罪のためにイエス様が十字架についてくださった。まったく改まらない何処までも陰険な者であることをご承知の上で、十字架に血潮を流し、命を捨てて和解を成り立たせてくださった。イエス様が私の神様、「主イエス様」となってくださったのです。私は「救われた」という言葉の意味が初めて分かったような気がしました。

その年、私は受洗し、家内となる美智子姉と出会い、結婚へと導かれ、私の人生は百八十度方向転換したのです。

信仰の兄弟姉妹を通して教わったことは数知れず、あの交わりがなければ今の自分はないのだと実感します。「偶然は一つもないよ」「飢え渇いていない人なんて一人もいないよ」「すべてイエス様のせいにするといいよ」「死は終わりじゃなくて、永遠のいのちの始まりだよ」…ベックさんがメッセージで教えてくださったこともまた聖霊の交わりの賜物でした。「イエス様が死から甦られてお示しくださった永遠のいのちは本物だよ！」「イエス様は生きておられるよ！」と末期の病床にあって兄弟姉妹たちが目をキラキラ輝かせて証してくださった奇跡のような交わりもありました。

イエス様からいただく交わりはすべて感謝なのですが、兄弟姉妹が体験した日常生活のワンシーンであったり、極めて個人的な、本当にささいな出来事だけど嬉しかったり、驚いたり、悩んだり、不可解だったり…そんな話がとても嬉しくなったのです。何気ない会話も、後になって「あれはイエス様だ！」と、イエス様の愛に気付かされ、「愛されているんだ！」と嬉しくなるのです。

少し前のことですが、長男の嫁としてご主人の年老いたご両親のお世話をされている信仰の姉妹が、お義父様がせん妄状態を通らされたのを機に病状が急に悪化して、とても驚いたと話してくださいました。実は五年近く前に召された私の父も同じで、入院していた病室で父はせん妄という小パニック状態に陥って、とても怯え、それ以来病状が急速に悪化していったのです。それまではとてもしっかりしていた父でしたから、少し不可解だったのです。

姉妹のお義父様との共通点から、父の不可解な姿は、手を加えていない人間そのものの姿なのだと知ったのです。誰にも、築き上げてきたもの、プライドやコンプレックスがあって、普段は全然気付かないけれども、それらが強力に私たちを突き動かしているのです。でも本当は無力で、幻想にすぎないと知った時、ショックの余り人はどうすることもできない…これが

8人の証し

Unser HERR lebt

父のパニックの姿だった…。いや、あれは自分自身の姿なのだ…とイエス様が気付かせてくださったのです。

あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（黙示録　3・17～19）

父は、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」（使徒　16・31）の約束の通りに、主イエス様の家族とされて、静かに天の御国に引き上げられていきました。

私は家内の美智子姉と二人で暮らしています。御代田のセンターで結婚して二十三年の歳月が経ちましたが、今もなお危なっかしい歩みの連続です。でも、失敗は失敗に終わらず、罪の中でもがき苦しんだ後で、イエス様の御前に共に頭を垂れて祈りあうように導かれて今日まで参りました。すぐ祈ることを忘れてしまう相変わらずダメな私たちに、寝たきりの母が「あんた。祈ったかい？」と目で訴えてきます。母の障害は更に進み、今ではしゃべることも叶わぬ身となりました。けれども、イエス様が何もできなくなった母の内に、御霊なる神様として生きておられ、母を祝福し、大いに用いておられることを見させて戴いています。

母を通して主イエス様の喜びが私たちの喜びとなることが如何に祝福であるかを教えて戴いています。どこまでもダメで、陰険で、感謝のかけらもない者を

愛し、蔑（さげす）むことなく、励まし、そしてまた迎えに来てくださる主イエス様をほめたたえ、その日を待ち望んでいます。

主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましょう。しかし、あなたが赦してくださるからこそあなたは人に恐れられます。

（詩篇　130・3～4）

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

（1ヨハネ　4・9～11）

全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。

知れ。主こそ神。主が、私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である。感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。

主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。

（詩篇　100（感謝の賛歌）・1～5）

山本信義

一九六〇（昭和三十五）年、東京都武蔵野市生まれ。翼陰幼稚園、武蔵野市立第二小学校、明星学苑中等部、都立神代高校、代ゼミ、東京農工大学農学部、日本食品化工（株）、日本シクロデキストリン工業会

家族：妻　美智子、金魚たち

山本春彦（父　故人）・愛子（母）、石原恵子（姉）、林光子（妹）

8人の証し　Unser HERR lebt

驚くべき光の中に

山本　美智子



左が美智子さん、義母の愛子さんと

私は、かずら橋で知られる徳島県祖谷（いや）に生まれました。両親と五歳上の兄、二歳上の姉、そして同じ敷地に住む父方の祖父母の七人家族の中で大自然に囲まれてのびのびと育ちました。親に叱られては祖父母の家に駆け込んでいました。両親は子供たちに愛情を注ぎ育ててくれたと思います。

主イエス様との出会い

高校卒業後の進路は一か所だけ開かれました。進路が定まらず焦（あせ）っていた時に、同級生から「一緒に受けない？」と誘われて軽い気持ちで受けた所でした。ナースを目指してはいなかったものの選択の余地もなく、仕方のない思いを胸に高知の看護学校に進みました。

決断力に乏しい私は自然な流れで就職しました。大学附属病院に勤務するナース二年目になった二十三歳の時に、看護学校同期である大須賀弘子姉妹に誘われて初めて土佐山田キリスト集会（今の高知集会）に行きました。配属の希望が叶わなかったことなどから、やる気のない毎日を過ごしていました。集会に行ってみると、集われている方々にそれまで触れたことのない何とも言えない暖かさを感じました。皆様とのお食事とお交わりはとても楽しい時間でした。ベック兄から個人的にお聞きした三位一体のお話はさっぱり分かりませんでした。

弘子姉妹とは同じ外来勤務で、誘われるまま一緒に集会に行きました。そしてこの集まりには何か真理があるかも知れないと思うようになり、気が付くと神様は居（お）られる、イエス様という方であると信じていました。

二十五歳の時に母や幼なじみも立ち会ってくださる中、高知の日ノ御子川（ひのみこ川）で、洗礼を受けました。すっきりした気持ちでした。この日の景色がキラキラ光り輝いていたのを三十五年たった今も鮮明に残っています。聖書の最初のみことば「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記　1・1）は、はじめに大好きになったみことばです。家庭集会や喜びの集いが持たれるようになり、ベック兄は東京からご自身の運転で瀬戸内海をフェリーで渡られ、たいへんな時間をかけて高知に来てくださっていました。

結婚

なるつもりではなかったナースも十四年目になっていました。お祈りのうちに大学病院を辞めてキリスト教の病院に勤務していました。ホスピス病棟での困難な仕事の時も主イエス様に守って頂（いただ）きました。死を前にされた患者さんとそのご家族の抱えておられる悩みはとても大きすぎて、当時の私の人生の持てるすべてを出しつくしても関わり切れるものではありませんでした。「死んだらどこ行くの？」。教科書には載（の）っていない死後の質問への対応は、

個人又は病院チャプレンに委(ゆだ)ねられることでした。私にとって主イエス様に出会わせて頂いていたことは本当に感謝なことでした。主イエス様がいつも共にいてくださる平安を頂き、悩みながらも前進することができました。ナースになって良かったと心から思えるようにもなりました。

結婚はイエス様を信じる方と思うようになり祈っていました。結婚しないのがみこころならその人生を主が必ず祝福してくださる、私はこのまま独身だろうと思っていた頃、集会の方からお話がありました。「あの兄弟だけど会ってみる?」と御代田のセンターの壇上に立っている方を指して言われました。全然知らない方で、何とお答えすれば良いのか、返答に困っていたのですが、「会ってみる?」「は、はい」ということで会ってみることになったのです。お会いした時に不思議と安堵(あんど)感を覚えましたが、聖書を読んで祈ってみても御心は分りませんでした。ベック兄に相談しましたところ、「神様からは電報はこないよ、お互いがイエス様を信じてお互いが気に入っていたらそれでいいと思うよ。彼はいいよ、真面目だよ、結婚したらいいと思うよ」と。御心はわからないけれど、共に主イエス様に従って歩ませて頂けたらとの一致した思いが共に与えられ、二度お会いして結婚が決まりました。私は石橋を叩いても渡らない性質と言われるのに、二度会っただけで結婚が決まったことに友人は奇跡だと思ったそうです。同僚からはどんな人と結婚するのか尋ねられ「さあ、私も良く知らない」としか答えられず、私が知っていたことは彼の略歴とお母様は寝たきりらしいということでした。

しかし不思議と何の不安もありませんでした。お会いして約三か月後の一九九四年八月二十日に御代田の国際福音センターで、先に決まっていた主人の妹夫婦に加えて頂き一緒に結婚式を挙げて頂きました。結婚指輪に刻んだみことばです。

酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。

いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。

キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。

(エペソ　5・18〜21)

介護

聖書に出会い、自分は罪人だと知るようになりました。結婚後にメッセージで罪の悔い改めは具体的にした方が良いと聞きました。洗礼を受けて十年経っていましたが、何をどう悔い改めたらよいのかピンときませんでした。しかし気付くにはそう時間はかかりませんでした。結婚生活を通して自分の言動が夫という鏡に映し出されよく見えました。自分には良きものがないことを直ぐに実感するようになり、自分の存在自体が罪のように思えて苦しくなっていき、主イエス様に命を取って欲しいと休む前にお祈りしてぐっすり眠りました。朝、目覚めた時、私は生きていると思いました。「生きていていい」と主イエス様のお声をお聞きしたようで嬉しくなりました。私が生きているのは私の意志ではなく、私は生かされていると思いました。

結婚五年目頃から主人の実家に住まわせて頂くようになり、下に住む義母の介護にヘルパーさんと共に積極的に関わるようになりました。優しくお世話ができる日もあればできない日もあり、早々にナース時代には感じたことのない心の葛藤(かっとう)を覚えるようになりました。心の伴わない義務感で接することがとても苦しくなっていきました。義母に会えば自分の嫌な面を見させられるので、できれば避けたい。しかし介助なしにはお水一口も飲めない病状

の義母の所に行かないわけにはいきませんでした。日々心に湧き出る悪い思いを自分だけに納めておくことは怖くて、主イエス様にそして主人にも心の中にあるとおり告白していました。主人はただ聞いているだけで何のコメントもありませんでしたが、私には大きな支えでした。そんな心の中の葛藤を抱えてのお世話の中で、私は思わず母のお尻を叩いてしまいました。その手が出た瞬間、私の内側で大きな音を立てて何かがガラガラと崩れていきました。思ってもみなかったプライドが自分の中にあったことを悟りました。ナースをしていたので私には介護は簡単にできると思っていたのです。

優しくしたいのにできない、今日もダメでした。また今日もダメでした、ごめんなさい。自分ではできない。そして、できた、できないとか自分を評価することもやめました。その日の結果のままの私をよろしくお願いしますとイエス様に祈っていました。そして、どのくらい経った頃でしょうか？義母の所へ降りる階段の足取りが軽やかになっているのにふと気づきました。同時にそれまで苦しかった葛藤、また理由もないのに義母を拒絶する感情もなくなっていました。義母が可愛いと思う暖かい気持ちになっている自分自身が驚きでした。何が起ったのか戸惑いましたが、祈りに主が成してくださったことだとわかりました。状況は何も変わっていないのに、義母と一緒にいる時間が楽しく、それまで見えなかった義母との時間にたくさんの恵みに気付くようになりました。自然体の自分で居られるようにもなりました。

「優しくしたいと思ってもできなくてごめんなさい」と私が言いますと、「それは人間だから、イエス様から力を頂いたらいいのよ」と、イエス様を信じる義母が言ってくださいました。また「悪い嫁でごめんなさい」と謝ると、義母は「いいんだよ。イエス様が赦してくださっているんだから」と。責められて当然なのに

も拘らず、一度も責められた記憶はありません。お会いした時から寛容な心で優しく受け入れてくださっていたのは義母でした。まるでイエス様が義母の形をとってそこに居られるかのようです。

義母の名前は愛子です。介護に関わった当初義母から「愛子のこと好きかい？」と毎日のように聞かれました。答えられないでいる私に義母は「嫌いでも、私は美智子さんのことずっと好きだよ」と言ってくださっていました。いつの間にか私は愛子義母が大好きになっていました。

義母はけいれんのため、二〇一五年十二月入院となり病院での介護を受けています。在宅の義母とゆったりと過ごした日々は主の恵みをたくさん頂いた、とても尊い時間でした。

（キリストは）自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。（1ペテロ　2・24）

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。（ルカ　7・48）

父の召天

元気だった私の父は首に鶏卵大のこぶのような物が出て検査を受けました。肺がんでした。父に早く天国のことを伝えなければと、みことばを伝えたところ、父は「死ぬことばっかりや」と一言ポツリと言いました。「受けた病は仕方ない」とも言っていましたが、父の心に軽く入っていけないものを感じ、私は何も言えなくなりました。お父様を先に召されていた姉妹から「祈っているだけで何も言わなくていい」とのお言葉に強く励まされました。

父の傍にいる時間を十分与えられたものの、相変

わらずイエス様を伝えることはできないばかりか祈りも十分とは言えませんでした。ベック兄にお見舞いしていただいた時、父はベック兄のお話をじっと聞いていました。抗がん剤で一瞬小さくなった腫瘍は、薬に勝って勢いがあり治療は二回で終えました。入院二か月の後、在宅で二か月過ごすことができました。召される一週間前、飲んだ薬がむせてしまい呼吸苦となり緊急入院しました。召される三日前の日曜日、父はほとんど眠っている状態でしたが、私はお祈りするなら父のそばでと思い、耳元で祈りましたら、父が「アーメン」と言ったのです。ともに付き添っていた母も姉も聞いていました。偶然かも知れないと思いましたが、次も祈ってみるとやはり父は「アーメン」と言います。偶然ではありませんでした。

また父は目が覚めると喉の渇きで何か飲ませるよう訴えますが、誤嚥するため渇きを満たしてあげられません。思案した結果、私は次のみことばを読むことにしました。

わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

（ヨハネ　4・14）

読み終えた時、父はにっこりと微笑みました。その微笑はそれまで見たことのないもので、みことばを聴いて喜んだ、満足したという感じでした。父は六十七歳の誕生日を目前にイエス様のところに帰りました。父が召される一年前、一九九六年の秋に私の両親は私たち夫婦と一緒にスイスの喜びの集いに行くことができました。両親にとっては初めての海外旅行であり、初めての新婚旅行でもあり、両親はとても喜んでいました。誘った当初は同じ敷地に住む祖父が召されて間もなかったため、両親は次の機会にするとためらっていた旅行でした。次の機会はなかったことは家族も本人でさえも知りませんでした。主イエス様だけがご存知で両親を旅行へと押し出してくださったのでした。

父の召天後しばらくして、父のいない悲しみに突然襲われ涙が流れてきました。このことを近くの姉妹にお話ししましたところ、詩篇21篇をすすめられました。

あなたは彼を迎えてすばらしい祝福を与え、彼のかしらに純金の冠を置かれます。
彼はあなたに、いのちを請い求めました。あなたは彼に、とこしえまでの長い日々を与えられました。
御救いによって彼の栄光は、大きい。・・・あなたは、とこしえに彼を祝福し、御前の喜びで彼を楽しませてくださいます。

（詩篇　21・3〜6）

このみことばを見て驚きました。父のことが書かれていると思ったからです。

父は病気が分かった時に「もう少し生きたかった。父さんには夢がある」と話していました。父は、私の兄の家業を孫にバトンタッチするまではと希望を持って手伝っていました。引退後は車を買い替えて自分の時間をのんびり過ごしたいというささやかな楽しみを抱いていたようです。その父の願いに対して答えてくださった主の恵みの大きさに圧倒されました。限られたこの世のいのちではなく、終わりのない永遠のいのちを与えてくださった。目には見えなくなった父がまったく苦しみのない天国で祝福され主イエス様の前で喜んで楽しんでいる様子が書かれていました。気掛かりだったことと悲しみの涙は一瞬にして消えました。みことばの力を体験しました。私が父に伝えることができなかった永遠のいのち、死は終わりではないことを、今も生きている父のいのちを通して主イ

エス様が私にお伝えくださいました。

私の知らないところでたくさんの兄弟姉妹が父のためにお祈りくださっていたことを後になって知りました、父と家族は兄弟姉妹のお祈りに支えられていたことを知り心から感謝しました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか。」

（ヨハネ　11・25〜26）

終わりに

信仰を与えていただいてから三十五年になります。ベック兄が私の両親に会ってくださった時、「（家族の中で）美智子が初めに救われたのは、（家族の中で）一番ダメだったからですよ」と仰いました。当時はピンときませんでしたが、その通りでした。

自分には良きものは一つもないと重々（じゅうじゅう）体験していますのに、褒（ほ）められるようなことがあると自分の力と勘違いします。それは確かに勘違いであると体験する時がありました。心が真っ暗でとても苦しい状況がありました。真っ暗な中に見えたものがありました。虚しさ、孤独、絶望だけでした。そこには褒められるような良きものは微塵（みじん）もありませんでした。ここから私は救って頂いたのだと思いました。主イエス様の恵みによって、ダメな私は罪赦され光の中に招いて頂き新しいいのちに生きる平安、喜び、希望を頂いていたことを改めて教えて頂きました。尊き主イエス様への感謝と喜びでいっぱいです。心から尊き主イエス様の御名を褒めたたえます。

尊き主イエス様に直接お会いするその時を、お出会いしたすべての方と共に天国での大賛美を大変楽

しみにしております。

あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。（1ペテロ　2・9）

光りが輝く、天の御国で、
神様のそばで、共に歌いましょう。
神様の川は、永遠のいのちあふれ、
主とともにいつまでもいるしあわせよ。

（日々の歌223番の4番から）

御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。

（黙示録　5・13）

山本　美智子
一九五九年、徳島県に生まれる
櫟生（いちう）小学校・中学校卒
県立池田高等学校卒
国立高知病院附属看護学校卒
家族　夫　信義（のぶよし）

主は生きておられます

室田　勝美



妻の恵子さんと

私自身は、この足がたわみそうで、私の歩みは、すべるばかりだった。

（詩篇　73・2）

しかし、

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。

（詩篇　138・8）

私と恵子は高校生の時に出会いました。そのころの私は、いつもむなしさを抱えていて、その空虚感を埋めようと必死になっていました。それを埋めるために何でもしました。出会って間もなくいつも一緒にいるようになりました。むなしさを埋めることができるかもしれないと思ったからです。親の反対や学校の先生からの指導も無視して、やりたいようにやっていました。私たちは何でも一緒にやり、良いことも悪いことも何でも一緒でした。ですから、全部とは言えませんが、ある程度は同じ思いでいられました。

二十一歳で結婚しました。すぐに長男が生まれ、長女も与えられました。私は、相変わらず自分のしたいことを優先させていました。音楽が生活の中心でした。そこに答えが隠されているように思っていました。しかし実際にしていることは、わがまま以外の何ものでもありませんでした。自由を求めているのに、どんどんと自分で自分を束縛していきました。でもそのことにも気付きません。自由になりたいと思い、家を捨て、仕事も捨てて、家族を連れて軽ワゴンに必要最小限の荷物を積んで、生まれ故郷の北海道を出ました。

それからの生活は、定職も持たず、定住もせず、不安定な状態が続きました。何とも言えない不安と、いつも何かに追いかけられているような焦りに、どうすることもできずにいました。そのような中で、三人目の命が与えられました。

恵子は、次第にどんどん追い詰められていきました。普通の、ごく普通の生活がしたいと、切実に願っていたからです。しかし私は、そんな恵子の思いにもまったく気付かずにいました。この時期に二人の間にあった小さな溝は、知らないうちに次第に大きくなっていきました。その溝の深さに気付いたのは、恵子から離婚して欲しいと言われた時です。やり直そうとしましたが無理でした。仕事も続かない、お金がない、何をしても失敗です。そのような時に、尊敬をしている大切な友人から、聖書のみことばを聞かされました。意味はよくわかりませんでしたが、とても明るい感じがしました。初めて聞くもので、これは本物だと思いました。

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。

（イザヤ　9・2）

8人の証し

Unser HERR lebt

失敗だらけの生活は、二十八歳で主に出会うまで続きました。しかしイエス様に出会い、イエス様のことばである聖書のみことばを聞き、ほんとうの自分の姿を見せられ、それを認めた時、頭を下げる以外にはありませんでした。自分がすべて悪かったと思ったからです。この時、私は自分の罪というものを知らされました。生まれて初めて本当に悪かったと思って、神様に向かい、ごめんなさいと言うことができました。決して癒（いや）されることのなかった心の奥深くが満たされていくのがわかりました。一瞬にして世界が変わったようでした。いつも暗やみを愛し、その中に埋もれていた者に光があたりました。

そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

（創世記　1・3）

根本的なものが変わりました。私はやっと音楽と薬物中心だった生活から解放されました。どんなに頑張ってもできなかったことを、主がしてくださいました。

今日もイエス様は同じようにしてくださっています。何より奇跡なのは、このようなわがままな者が、赦され、イエス様を信じるようになったことです。イエス様が、ほんとうに慕わしくなってきたことです。だから、再臨の主イエス様に早くお会いしたいと、その思いは日々強くなっていきます。

しかし、自分自身は何も変わっていません。これからも変わらないと、みことばで知りました。でも主は、わたしにつながっているならあなたはそのままでいい、と言ってくださいます。こんなことを言ってくれる人は一人もいません。イエス様だけです。ですから私はイエス様から離れられません。

先ず私が救われ、恵子も間もなくイエス様を信じて救われました。私たち夫婦は、同じ土台に立って同じ方向を見る者となりました。妻である恵子は、神様によって与えられた人、助け手だと知りました。私たち夫婦は一度完全にダメになって、イエス様によって新しくなりました。夫婦の間にはイエス様がどうしても必要でした。主イエス様のいのちとその御愛によって、ふたりは初めて夫婦として保たれています。

夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

（1ペテロ　3・7）

二〇一二年六月七日、妻・恵子に起こされたことを通して、主イエス様がご自身を証しされました。

兄弟たちよ。私たちがアジヤで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださるという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださるでしょう。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。（2コリント　1・8〜11）

二〇一二年六月七日、午前七時四十三分、恵子はトラックと接触、意識を失うことなく、救急車で近くの病院に搬送されました。第一報を仕事場で受けました。電話の向こうから、「消防のものですが、室田様

8人の証し

Unser HERR lebt

は」と聞かれ、「私です」と答えると、「驚かないで聞いてください。奥様が交通事故にあわれて、重体です。今から病院に搬送しますので、すぐ来てください」と言われました。一瞬、頭の中は真っ白でしたが、あぁ、この時が来たな、と思いました。そして、すぐに、イエス様がされた、と思いました。命にかかわる状態であることを、知りました。

その日の朝、恵子はいつものように自転車で家を出て、買い物をしてから職場に行こうとして、通常とは反対の方向へ向かって行きました。その日は時間にも余裕があったので、ゆっくり走っていました。右後ろから自転車で追い越されました。その際に自転車のどこかがぶつかって、バランスを崩して、恵子は車道側に倒れかけました。そしてちょうど通りかかったトラックの左側の後輪に接触しました。ちょうどそこは交番の真ん前で、交番の防犯カメラにその一部始終が記録されていたそうです。もちろん外部の人間には公表できないものです。おまわりさんの話によると、「奥様はトラックに接触した後、はじきとばされた」と言われていました。かなりの衝撃だったと思います。その直後、恵子は体を動かそうとしましたが、腰から下が動きません。激痛の中で恵子は一度も意識を失いませんでした。今までに体験したことのない痛みだった、と恵子は言っています。事故直後、投げ出された車道の上で、激しい痛みの中、「イエス様」「イエス様」とずうっと言っていました。そして、あぁ、これで私は召されるのかなぁ‥と思ったそうです。事故現場で、恵子は外傷がほとんど見当たらず、出血が見られませんでした。相手の女子高生はごめんなさい、ごめんなさい、とずうっと繰り返していたそうです。

あとで知ったのですが、自転車に乗っていた女子高生は、通学途中で、この日、いつもと違う初めての道を走っていたそうです。この話を聞いて、主イエス様はすべてをご存じで、こうなることをお許しになったこ

とが、さらにはっきりとしました。

病院では、執刀してくださっている先生から状況説明を受けました。「今は、まだ何とも言えません。すでにかなりの出血があり、危険な状態ですから、とにかく内出血を止めなければなりません」というような内容のことを言われました。

その日はちょうどロスの喜びの集いのために多くの兄弟姉妹が日本を発つ日でした。祈ってもらうためにすぐに、ベック兄をはじめ何人かの兄弟方に連絡を入れました。ベック兄は、「主から受け取らなければ、おしまいだよ」と言ってくださいました。本当にそう思いました。両親と兄弟たちに電話をして、恵子の状況を話しました。本当に驚き、ショックだったと思いますが、恵子の母は、イエス様に祈ると言ってくれました。この時、家族はみな主イエス様と初めて真剣に向き合ったのかもしれません。

状況は厳しく、どうなるのかわからない状況でした。しかし、何かシェルターのようなもので包まれているような、主イエス様の平安にすっぽりと囲まれて、過ごすことができました。イエス様は決して間違ったことはなさらないと確信がありました。子どもたちもそのようでした。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（1ペテロ　4・12〜13）

執刀された先生が何度も私たちのところに来てくださり、その都度状況を説明してくださいました。けがは、骨盤骨折で、五〜六か所骨折がありました。背骨は何か所か欠けていました。恥骨も二か所

8 人の証し

Unser HERR lebt

折れていました。左側の骨盤が上から下まで大きく割れていました。骨盤というところは、血管と神経が集中している場所で、とても重要な役目を担っています。病院に搬送された時点ですでに内出血が一リットルと聞きました。それは、恵子の体重から計算して殆ど致死量です。動脈からの出血を止めるのが最優先でした。

先生と看護師の方々は、必死の手当をしてくださいました。私と子どもたちは救命救急センターの片隅で何時間かを過ごしました。いろんな思いが交錯していました。

四～五時間が経ち、「動脈からの出血がほぼ止められました」と伝えられました。一命は取り留めたものの、予断を許さない状態であることには変わりはありませんでした。しかし、一つひとつをイエス様がみこころ通りに取り扱ってくださっていることに心から感謝をいたしました。

恵子は救命救急センターから集中治療室に移動しました。集中治療室の待機ソファは兄弟姉妹で埋め尽くされ、ここはどこだろうと思ったほどです。次々に駆けつけてくださり、一緒に祈り、交わりがあり、主の家族であることを再認識させて頂きました。

しばらくたって、恵子と面会できるようになりました。私たちは言葉を失ったかのようでしたが、恵子が言いました。「ごめんね、ごめんね」。私は「これはイエス様がしたことだよ。だから、イエス様のせいだよ。恵子は悪くないよ」と言いました。ベッドの上の恵子は、事故のショックと激しい痛みで、一瞬別人のようでしたが、すぐに笑顔が戻りました。

割れた骨盤からの再出血防止のために、右と左の骨盤に三本ずつピンを刺して、それを外で繋ぐという創外固定という処置が施されていました。割れた骨盤が重なった状態でしたから、それを元の位置に戻すため、左足のひざのすぐ上にも、大腿骨を貫通

させたピンを刺し、八キロの重りで牽引してありました。その姿を見た時、十字架に釘付けられた主イエス様を思いました。骨盤骨折は骨折の中でも、一番痛いそうです。その痛みを和らげるために痛み止めが二十四時間、投与されましたが、それも効く時と効かない時があり、一日に三～四時間程度の睡眠が続きました。

そのような時、ベック兄とミンヘン姉妹、そして藤本姉妹が恵子に会いたいとＩＣＵに来てくださいました。ベック兄は、「大好きなけいこ―。どうしてこうなっちゃたのか、今はわからないけれど、あとで必ずわかるようになるよ。イエス様の十字架を考えてー」、と言ってくださいました。その二～三十分の間は不思議に痛みがなく、喜びと平安がありました。ベック兄姉が帰られて、また痛みが襲ってきました。

そのような中でも、恵子は二十四時間体制で看視してくださる看護師の方々に、みことばカードや「実を結ぶ命」の本などをお渡ししていました。不思議に殆どの方がみことばを受け取ってくださいました。本人がいち早く痛みから解放されるために、担当の先生は特殊な手術を予定してくださいました。簡単なものではなく、ほかの病院から医者を呼ばなければならないような大きな手術でした。しかし、その手術の前日に検査をしたところ炎症反応が出ました。

この状態での手術は危険だということで、急遽中止になりました。そのとき先生は、「奥さんは手術をしても、しなくても必ず歩けるようになるし、自転車も乗れるようになります」と言われました。耳を疑いました。しかし、はっきりと断言してくださいました。

さらに一か月間絶対安静が必要であり、その間、痛みとの戦いが続くということでした。恵子にとって、痛みは勿論（もちろん）ですが、寝返りも打てない絶対安静がとても辛かったようです。しかし主はそう

お決めになりました。

一般病棟に移り、少しずつ回復していきました。ゆっくりですが、確実にでした。痛み止めが減っていき、少しずつ食事が取れるようになり、睡眠時間も増えていきました。毎日、兄弟姉妹が代わる代わる来てくださり、祈りと交わりが与えられていました。

そのうちに恵子は、長期間安静にしていたために動かなくなった身体を動かす訓練が始まりました。大丈夫だった右足も固まってしまい、リハビリが必要でした。娘たちは仕事帰りに病院に寄って食事を手伝い、またご飯支度、洗濯、掃除と何でもしてくれました。長男も助けになりました。実際、肉体は疲れを感じ、お互いにイライラしたり、ぶつかることもよくありました。ですが、確かにそのような私たちに、主イエス様は働いておられることが、感謝でした。

恵子は、ベッドから降りて車いすに乗れるようになり、車いすを使って自力でリハビリに通うようになりました。立つ練習をして、松葉杖を使えるようになり、あっという間に、杖一本でのリハビリまでになりました。退院の話を先生がされた時は、そのことばに驚きながら喜びました。三か月余りの入院でしたが、長くもあり、短い時間でした。多くの人たちにお会いさせて頂きました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

主イエス様は、私たちをこの世で夫婦としてくださいました。このことを本当に主に感謝します。

わたしたちの中には期待できるようなものはなにもありませんが、互いにそれぞれにではなく、イエス様に信頼することができることを感謝しています。

ますます主を愛することと、恵子を愛し続けることを、主に願って止みません。

これから後もわたしは神だ。わたしの手から救い出せる者はなく、わたしが事を行なえば、だれがそれをとどめることができよう。

（イザヤ　43・13）

室田勝美（むろたかつみ）
一九六〇年北海道で生まれ、現在東京三鷹市在住
妻　恵子（けいこ）
長男　流（りゅう）、嫁　奈緒（なお）、孫　虹（こう）
長女　美星（みほ）、孫　実結（みゆ）
次女　あさこ

天国で再会するその瞬間まで

竹本　百合子



中列左端が百合子さん、ご家族親戚のみなさんと

二〇一六年の夏は、私たち家族にとって生涯忘れることのできない夏となりました。そして同時にイエス様のなさったことをはっきりと目撃し体験した夏となりました。私には姉が一人おりましたが、その姉、井上桃子が甲状腺癌のために天に召されたのです。

あれから一年が経ち今年も夏が来ましたが、風のある日の夕方には、姉が突然天に召された日のことを思い出します。もう地上では会えないことを考えると寂しい気持ちになりますが、聖書のみことばに励まされます。

死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。（1コリント　15・55）

姉が召天した次の日、家で葬儀用の写真パネルの写真を選んでいたところ、パネル製作の打ち合わせのため叔父の飯守恪太郎兄から電話がかかってきました。叔父は「急だったねぇ、驚いたよ…」などといった一般的なことは一切言わず、電話を取ると、「恪太郎です。『主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな』（ヨブ　1・21）。桃子の召天おめでとう、あの、葬儀に使うパネルのことだけれど…」と打ち合わせが続きました。私は叔父の言葉に一点の曇りもない清々（すがすが）しさにも近い嬉（うれ）しさを感じました。主が圧倒的な力をもって死に勝利されたと実感しました。

私の家族は三十年以上前から吉祥寺キリスト集会に集うクリスチャンホームでした。姉は二十五年ほど前にイエス様という同じ土台に立つ兄弟と、主に祝福された結婚へと導かれ、三人の子供に恵まれました。

私たち姉妹はとても仲が良かったのですが、私は姉に対して依存心が強く、姉が集会に行くなら行こうかな、行かないなら今日はやめよう、というような生活になっていました。仕事が忙しいことも大きな言い訳となりました。

二〇一五年に実家を三所帯住宅に建て直して、両親と私、姉家族、そして義兄のお母さんの義子姉妹、合計九人で住むことになりました。家が完成し、それぞれの引っ越しが進み、私が最後に引っ越すことになっていました。

その頃、姉が甲状腺癌であることがわかりました。私たち家族にはショックでしたが、十年前に姉がかかった乳癌のように手術をして良くなるだろうと思っていました。当時、私は二十六年務めた職場を退職することを決めており、退職へと導かれた月と姉が癌であることが分かったタイミングは図らずもまったく同時でした。仕事も辞めて時間もできたし、大好きな姉たちと一緒だし新しい家で楽しそう、などと考えていた矢先でした。

癌と診断され、在宅で直ぐに抗がん剤治療が始ま

り、癌を小さくして切除するはずでした。私が新居に引っ越してきた日は、姉が手術の準備のため入院する前日でした。姉の身体には、既に抗がん剤の副作用の症状が強く出ていましたが、引っ越しが終わると姉が上の階の私の部屋まで肩で息をしながらわざわざやってきて、「引っ越しの手伝いができなくて悔しいよ。ゆりちゃんと住むのは二十五年ぶりだね…」と言いました。

私は姉の病気に対する認識が甘く、もっと早くに引っ越してくることができたのに、退職の解放感を楽しみ、退職祝いをしてくれる友人たちから声がかかるたびに出かけていき、まったく引っ越しの準備をしておらず、引っ越しが遅れたことを後悔しました。

引っ越してきて間もなく、姉の腫瘍の勢いと悪性度が強く、抗がん剤は効果はなく、切除するのは不可能だということがわかりました。このとき初めて事態の深刻さを認識しました。この様な状況のとき、「悩まない、心配しない、恐れない」というベック兄の言葉を想像以上に自然に受け入れられたことは、私にとって最大の恵みでした。私はこのような状況の中で、自分の受け止め方がそのようでなくてはいけない、と考えたことはまったくなく、また努力してそうなれたわけでもなく、ただただ主の恵みによるものでした。

診断当初、姉と病気のことを話していたとき、病状を聞いた母の反応を尋ねたところ、母は、家が完成してどんな試練がこれからあるのだろうと思っていた、(もし姉が)天国に行くようなことがあったら、残された家族で細々とやっていくわよ、と言っていたと聞きました。日ごろは、ぶつかることもあるけれど、根本的には母の信仰を尊敬していたので、さすが母、一緒にやっていけば間違いないと強く思いました。

しかし引っ越してきて、姉の手術が不可能だと知ったときの母は、私が想像していたのとは違いました。「あなた、もこちゃんのこと心配じゃないの?」と動揺する母を裁き、辛い態度であたってしまいました。

そのような状況の中でも一番主の近くにいて魂が守られていたのは姉でした。「思い煩っても意味がないよ、イエス様がすべてをなしてくださるのだから…」が姉の口癖でした。基本的には自宅にいて容体が悪くなると数日入院するというパターンを繰り返しました。

私は、姉の明るさはイエス様のみわざに他ならないと確信がありました。動揺している母を姉のところへ連れていき、イエス様と共にいて明るい姉を見れば母も少し元気になるのではないかと思い、母を病院へ連れていったこともありました。末期癌の患者の元に動揺する母を連れていくなどということは常軌(じょうき)を逸(いっ)したことにも思われますが、イエス様の恵みを母と一緒に目撃したいという一心だったのです。

手術することができない姉は腫瘍に集中的に効果があるとされる新薬を服用していました。姉は何よりも帰宅することを望んでいたので、自宅で服用できることは本当に感謝なことでした。寝室から出られない状況でも、姉が自宅にいるだけで家の中が明るくなりました。しかし肥大した腫瘍は気管や食道を圧迫し、声を出すことは困難でした。姉は、いずれ腫瘍が更に肥大して気管を圧迫し、酸素を取り入れることができなくなって意識を喪失しても、気管挿管や延命治療は一切しないということを医師に意思表示していると言いました。私は初めて姉の地上での命が長くないことを実感しました。

しかし私は、自分はどうすればいいのだろう、と姉のいない将来を憂(うれ)いたりして自分のことばかり考えていました。私は、何とか腫瘍と新薬のバランスを保ちながら数か月は地上に留まれるのではない

かと勝手に考えていましたが、二〇一六年八月十三日、風の強い日の夕方、姉は五十四歳で突然天に召されました。病気を発症してから召天まで四か月でした。

その時、姉は入院していましたが、連絡を受けて病院に駆けつけると、既に意識はなく、苦しそうに自発呼吸していました。家族も駆けつけ、人の出入りがあった中で、図らずも姉の二十歳の長男と姉が二人だけになりました。彼は今までの自分の気持ちを姉に話しているうちに自分の罪を告白するにいたり、これからはイエス様と共に生きていきたいと伝えました。彼が自分で努力した結果ではありませんでした。姉は既に意識がありませんでしたが、頷（うなず）いて涙をながして天に召されました。私は後でこの甥の話を聞いて、姉はどんなに嬉しかったことだろうと思い、何も思い煩うことはなく、すべてイエス様が最善をなしてくださったと確信しました。

葬儀にはたくさんの未信者の方が参列してくださいました。突然の姉の死に、みな驚き、言葉が見つからない様子でした。兄と子供たちは式の前には集会所の玄関で皆さんにご挨拶し、式の後には帰っていかれるお客様にそれぞれに会ってご挨拶しました。式の後で子供たちは「式に来たときはみんなとても悲しい顔をして何て言っていいかわからない、っていう顔をしてたけど、帰るときはみんな違う顔をしてたね、ニコニコしてる人もいた」と話していました。母親が一週間前に急に亡くなった遺族とはとても思えませんでした。

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

（ヨハネ　12・24）

姉の召天後、子供たちは寂しくないのかなどと勝手に気を揉（も）むこともありますが、姪は葬儀の挨拶の中で母がいなくなって寂しいときもあるが、そのような気持ちを解決するにはイエス様に繋がるしかない、と告白しています。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、…あなたを守る。…あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。

（イザヤ　41・10、13）

まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。

（詩篇　22・24）

私たち家族には姉が天国のイエス様のみもとで憩っているという確信があり、この確信なしに姉の死を乗り超えることはできません。今まで親類の召天や、昔から一緒にキリスト集会に集っていた兄弟姉妹の召天を経験し、その度（たび）に人生の最終局面おいて死を克服する主の圧倒的なみわざを体験することができました。主の研（と）ぎ澄まされたみわざを目撃するのは結婚式よりも葬儀だと思います。今でもその思いに違いはありません。

しかし姉の召天は今までの近親者の召天とはまったく違う、想像をはるかに超えるものでした。姉の召天については、ゆるぎない喜びと平安があり、このような確信を与えてくださった主に、心から感謝しました。

それでも姉の召天から時間が経つと、地上では会えない寂しさや遺（のこ）された家族を心配する気持ちに時折り囚（とら）われるようになりました。どうして天国に行くのが私ではなく家族の多い姉だっ

たのだろう、どうして腫瘍が良性のうちに自分が強行に手術させなかったのだろう、と悔いたりしました。このような思いは、しばしば黒い霧のように音もなく突然忍び寄り、病的に私を苦しめました。ベック兄は生前、父が交通事故で重傷を負ったときに「どうしてそうなったんだろう、なんて考えてはダメだよ、サタンが喜ぶだけだよ」とおっしゃいました。このベック兄の言葉はみことばと同じくらい私の助けとなりました。

また私は姉が闘病中、近い将来、天国に召されるという実感が乏しく、姉とそういったことについて話したことがありませんでした。私たちは世間の普通の姉妹よりも仲が良かったと思うのに、人生の最終地点で最も姉が望んでいたことを、どうして、してあげられなかったのだろうと無力感に苛(さいな)まれたこともありました。姉は天に召される数時間前までＬＩＮＥで日常的なやりとりをしていたのに、病院に駆けつけたときには意識がなく苦しそうに呼吸をしており、召天後もその姿が脳裏から離れなくなったり、突然天国に行ってしまった姉が言い残すことはなかったのか、イエス様、どうして何も言い残すことなく姉を突然召してしまったのかと思い悩むこともありました。

しかしイエス様は生前姉と信仰の交わりがあった兵藤幸江姉妹の口を通し、私に語ってくださり、今回の姉の召天のすべてが主のみわざであり完全であると確信させてくださいました。

私は姉が召された次の夏に御代田の福音センターの近くの別荘で少しの間一人で過ごすことになりました。家には吉祥寺集会で一九八九年に出版された「光よあれ 第４集」が一冊だけ置いてありました。当時集会に集っていた兄弟姉妹にイエス様がどのように働いてくださったかをそれぞれの方が記した本です。何となくめくっていると、吉祥寺集会の一瀬かほる姉妹もお姉さんの長澤文枝姉妹を天国に見送った姉妹です。姉の召天後、ことあるごとに声をかけてくださり、励ましてくださいました。証しには、文枝姉妹が召天される前にかほる姉妹に送られた手紙が書かれていました。ご本人の了解を得て転載させて頂きます。

「いつもあなたにすっかり面倒をかけてしまいありがとう。これから先も、両親のこと、弟のこと、きっと私にできることは数少なく、あなたたち夫婦に心配をかけると思いますが力になってあげてください。私は生きている限り、皆のために祈ります。私の病気についてはあなたも覚悟していると思うけれど、全治する方法はまだ見つかっていないし、あと数年生きられれば、というふうに思っています。私は、全てを支配なさっているのは、ただおひとりの神だけであると信じておりますが、神が私にこの病を背負うようになされた以上、この神は私に対し、奇跡をおこして癒してくださるのがみこころであるとは思いません。私自身の心の中に、これほどの信頼と、死に対する恐れからの救いをもたらしてくださったこのこと自体が、私にとっては奇跡に等しく思われますから。

ただ心に残るのは、まだ信仰を持っていない夫が私の亡きあとどんなに苦しみ、絶望と孤独を味わうだろうか、ということと、おそらくまだ幼いうちに母をなくす子供たちが、どんなに寂しい時期を過さねばならないだろうかということのみです。人間的な目から見ればこの上なく不幸な事態を通して、夫と子らがより早く主なる神を知り、神様に委ねることのすばらしさを知ることができれば、もはや不幸ではなくなるということを信じて疑いません。けれども、そのどん底の時期に、やはり肉

親の人々が力になって愛してくだされば、その心の痛みもより早く癒えることも真実だろうと思います。だからそのことをあなたに頼んでおきます。私がどのように生きたか、どのように神を信じて天に召されたか、子供たちに伝えてやってほしいのです。私の生きざまをしっかり見ておいて、幼い子らが成長した時に教えてやってほしいのです。

（中略）

私自身のことは心配しなくて大丈夫。神に召されるまでしっかり生きます。体のことではおせわになることもあるでしょうからお願いします。よろしくね。

長澤文枝」

私はこの手紙を読んで言葉を失いました。この手紙は状況の違いこそあれ、本当に姉が私に書いた手紙のように思われました。それから何度も読み、この手紙に励まされ慰められました。想像を超えた大きな主のみわざでした。

姉の葬儀の日に召天されたベック兄も日頃たびたびおっしゃっていたように、信仰を一人で守ることはできません。主は、人一倍乏しい歩みの私に、その都度、必要に応じて兄弟姉妹方との交わりを備えてくださり、主の御心を示してくださいます。天国で姉と再会するその瞬間まで、そのような備えをしてくださる主に心から感謝します。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（2コリント　4・17〜18）

愛する者たち。・・・あなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（1ペテロ　4・12〜13）

竹本百合子

一九六六年九月二十一日　東京都に生まれる

和光高校　同大学卒業

一九九〇年〜二〇一六年　日本航空（株）勤務

父　竹本隆（たけもとたかし）

母　竹本裕子（たけもとひろこ）

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）



日曜礼拝・福音集会

	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より北陸新幹線にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

モーセの十戒　神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。

光よあれ －私たちは主のもの



証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



Unser HERR lebt

主は、生きておられる

主は生きておられる　第47号

定価100円（税込み）2018年1月15日初版

編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　久保和子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会